7. プリントを利用して読む

短期間に無理して覚えたものは、忘れるのも速いものです。とりわけ、テストのために覚えたものなど、テストが終れば、忘れてしまうのが普通です。

漢字などのように、一生使うものの学習は、長期間に亘って、ゆっくりと学習を重ねなければ、決して身には付きません。だから、石井方式では“新出漢字”という特別の扱いはしません。

その代り、出来るだけ漢字を読む機会を作って与えます。そのため、普通の先生なら、話で済ませるものでも、黒板に書付けて読ませます。

また、プリントも毎日作って与えます。私は、ほとんど毎日、原紙に二枚は、子供たちに読ませるための教材を作って与えました。それは大変ではありますが、子供たちに“読む”習慣を与えるために、ぜひ必要だと思ったからです。

どんな授業でも、分析したら“聞く”活動が大部分を占めるでしょう。“話す”“読む”学習でさえも、それは一人だけの活動であって、他の子供たちは、それを“聞”いているのです。

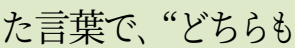
だから、国語の学習としては、だれもが“読む”“書く”学習をするような工夫をする必要があると思います。私は、そのために、毎日、プリントを用意し、それを“読み”、それから“書”かせました。

プリントには、多くの漢字が使われていて、だれでもそれを読まないことには、国語の学習が進められないようになっています。問題を

コラム　諺

五十歩百歩

二千三、四百年前、魏の国の恵王を発奮させるために孟子が言った言葉で、“どちらも似たりよったりで大した違いが無い”こと。



【一歩】　片足を前に踏み出したことを言う場合と、これを「半歩」と言って更に他の足を前に踏み出すことを「一歩」と言う場合がある。

読んでは、その解答を書き、問題を読んでは解答を書くのです。

では、その一例を下記に掲げます。

これは、私が、一年生の国語の学習で実際に作ってやらせたものです。一年生でも、こういう問題を、自分で読み、それに応じる解答を書くことが出来るのです。

源五郎鮒を読んで、次の質問に答えなさい。

一、源五郎さんは何を持っていましたか。

（答、不思議な太鼓を持っていました。）

二、それはどうして不思議なのですか。

（答、鼻が高くなったり、低くなったりするからです。）

三、不思議な太鼓で鼻を高くするには、どうするのですか。

（答、太鼓の片方をたたいて、「鼻、鼻、高くなれ」と言います。）

四、源五郎さんは、どんなことをして、大勢の人に喜ばれましたか。

（答、太鼓をたたいて、大勢の人の鼻を高くしたり低くしたりして喜ばれていました。）

算数も、文章を読んで、式を立てて計算をする“文章題”を、毎日、

1. 春男さんの前に 3 人、後ろに 4 人並んでいます。皆で、何人並んでいるのでしょう。

   （答、3 人＋1 人＋4 人＝8 人）

2. ケーキが 12 個あります。4 個ずつ 2 人にやりました。何個残っていますか。

   （答、12 個－4 個－4 個＝4 個）

3. 花子さんは，色紙を 14 枚持っていました。妹に 8 枚やりました。残りは何枚でしょう。

   （答、14 枚－8 枚＝6 枚）

4. 時刻に合うように、長い針と、短い針を書入れなさい。

   （あ）9 時半　（い）6 時　（う）12 時半　（時計の針、省略）

5. 上の時計のうち、朝起きる時刻に一番近い時刻の時計はどれですか。　（あ）（い）（う）で答えなさい。

6. 夜寝る時刻に近いのはどれですか。

プリントにして与えました。子供たちは、この文章題を解くのが楽しくて、一日でも休もうものなら、不平を言うほどでした。

右にその例を掲げましょう。

石井方式で学習する一年生にとっては、こういう“文章題”を解くのは、クイズの遊びのようなもので、楽しくて楽しくてたまらないのです。

予防注射

みんなで並んで、保健室へ行きました。予防注射をするのです。内田先生が「良い子は痛くありませんよ」とおっしゃいました。みんなきちんと並んで、番の来るのを待っています。とうとう僕の番になりました。僕は、胸がどきどきして来ました。目をつむって、手を出しました。ちょっと、ちくっとしたら、もう予防注射は終っていました。「良かったね、これで病気にかからなくなるよ」と、石井先生がおっしゃいました。

社会科の教材もすらすらと

右記は、一年生の、入学後、二、三か月経った頃の社会科の教材です。この時の新出漢字は「、」の付いた七つの漢字でした。

このプリントは第二時限に使いました。第一時限で、「予防注射」と黒板に書いて、「予防」の言葉の意義から、学校で行う予防注射の意義についてお話をしてあっての第二時限です。すでに言いましたように、初出で覚えさせようとは思いませんから、「予防注射」が読めることは期待していませんが、このプリントを配りますと、「予防注射」と読む声があちこちから聞えました。

さて、配り終えると、指名読みさせます。新出漢字でも、「保健室」「待つ」などは、前後の関係でたいてい読みます。入学時には、一つの漢字さえ読めなかった子供たちが、わずか二、三か月で、この程度の文は、いきなり読ませても、かなりすらすらと読むようになります。

数人に指名読みさせてから、斉読させます。斉読といっても、私は、かなりのスピードで斉読させます。普通の話をする程度より遅くさせません。

効果が少ない性急な学習

前にも述べたことですが、「何回練習したんだから、覚えてもらわなくては……」と、子供に期待してはいけません。何回でも覚えるまで提出を繰返すのが教師や親の役目だと考えることです。

従来の“初出の時に習得をねらう”漢字指導は、教師や親にとっても大変なことであり、子供にとってもかわいそうなことです。やってきっと出来ることではないからです。こんな性急な学習は、一時的には覚えられても、必ず、間もなく忘れられてしまいます。

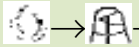
私の指導は、漢字こそたくさん提出しますが、指導者が「覚えなさい」と騒ぎませんから、子供たちも漢字を覚える義務感に責められることはありません。にもかかわらず、数多く、反復して読まされるので、いつとなく結構覚えていきます。

また、読めるようになったからといって、漢字についての認識は、いっぺんに深まるものではありませんから、習得できたと思っても、なお繰返し提出して読む機会を与える工夫が大切です。そうしてこそ、表現しうるⅡ漢字力”に育つのです。

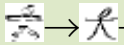
コラム　**諺**

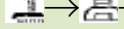
角を矯めて牛を殺す

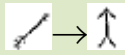
牛の角が曲っているのが気になって、直そうとして牛そのものを殺してしまった。僅かな欠点を直そうとして、かえってその全体をだめにしたり、取るに足りない問題にとらわれて肝腎な大問題を疎かにすることなどを戒めた諺。

 →角

【矯】　矢と喬から作られた字。喬は夭と高との合字。夭は大の字の頭の部分を横に傾けた形で、「生れつき頭がしっかりと立たない虚弱な人」を表した。

 →夭

 →高

 →矢